福岡工業大学　機関リポジトリ

FITREPO

Title	発話フォースと主要部移動
Author(s)	宗正　佳啓
Citation	福岡工業大学研究論集　第51巻第1号　P1-P14
Issue Date	2018-9
URI	http://hdl.handle.net/11478/1225
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher

Fukuoka Institute of Technology

発話フォースと主要部移動

宗　正　佳　啓（社会環境学科）

Illocutionary Force and Head Movement

Yoshihiro MUNEMASA (Department of Socio-Environmental Studies)

Abstract

The cartography analysis in syntax has dealt with wide range of syntactic phenomena. The functional categories in the left peripheral area of the cartography have their own discourse function. Force in the left peripheral field activates as force marker. However, this paper shows that Fin in the left peripheral field can operate as force marker and a verb moves up to there due to the force specification. It has been argued that V2 is related to feature specification in C (e.g.＋F) and V-to-T movement is dependent on richness of inflection and tense. The framework presented here provides a straightforward account of V1, V2 phenomena in Germanic languages. English shows cyclic demise of V-to-C and V-to-T movement in its history. A set of puzzles concerning the patterns of the phonoma is explained as a consequence of the analysis which admits gradual loss of verb attraction to Fin.

Key words: *left periphery, illocutionary force, Fin, head movement, V2, loss of verb movement*

1．序

従来，統語現象としての移動は大きくXP移動と主要部移動とに分けられる。XP移動に関しては，A移動とAバー移動がある。一方，主要部移動では動詞などのV-to-T，T-to-C移動がある。英語の疑問文においては，疑問文の形成の際に，wh疑問文の場合はwh句の前置と主要部移動のT-to-C移動が生起し，yes-no疑問文においては主語・助動詞倒置が生起する。

(1)　a. What did John buy yesterday?
　　b. Is he singing?

こうした疑問文に生じる主要部移動をA移動とAバー移動と同列のものとして扱うかどうかは理論的問題となっている。

本稿は，Rizzi（1997，2004）以来進展してきたカートグラフィーに基づき，(1)に見られる主要部移動は発話のフォースにより駆動されることを提案する。また，こうした分析を基に英語及び他のゲルマン語族の言語の主要部移動，正確にはV-to-T，T-to-C移動の共時的言語差異，及びその通時的差異を考察し，英語における動詞のV2，V-to-T移動の消失に対して直接的且つ統一的説明を与えることを目的とするものである。

平成30年5月21日受付

2．カートグラフィー

談話と統語論は以前は個別のものとして扱われてきた。しかし，Rizzi（1997，2004）以来談話の情報を統語に組み込む取り組みが，カートグラフィー（cartography）の名の元に行われている。このカートグラフィーの趣旨は普遍的な統語構造を地図のような形で綿密に表示し，トピックやフォーカスといった談話情報構造が統語構造と繋がるというものである。

カートグラフィーの枠組みでは文構造は以下のような三つの領域から成ると考える。

(2)　Peripheral field：話し手や聞き手の情報を含めた「談話/スコープ」が関わる領域
　　Inflectional field：一致，屈折等の文法範疇が関わる領域
　　Lexical field：主題役割，意味役割が関わる「語彙範疇」の領域

上記の構造を具体的に表すと以下のようになる。

(3)　［Force P［ TopP*［ FocP［ TopP*［ Q［ FinP［ TP［ vP ...
　　(*はその投射が繰り返し生起できることを表す)

Force P，TopP*，FocP，ChenTopP*，Q，FinPは従来の

CP に相当し，多様な機能範疇から成る豊かな内部構造を形成する。Inflectional field は従来の TP に，Lexical field は vP に相当する。文の左端に生じる peripheral field で，Force は発話力（illocutionary force）を意味し，Top（Topic）は文中において主題と解釈される要素が占める位置である。Foc（Focus）には焦点要素が生じ，Q（Question）は wh 疑問詞が生じる。Fin（Finite）は文の定形，非定形を表す要素が生じる。

では，左周辺部に生じる例を具体的に見てみよう。ある要素が左周辺部に移動すると，元位置での項としての意味解釈に加え，談話上の意味が付加される。

(4)　a. Her book, she gave *t* to John.
　　b. HER BOOK she gave *t* to John.

(4a)は話題化の例であるが，この場合，Top が話題化の対象となる要素を探査（probe）し，その指定部の位置に牽引する。移動した要素は元位置での直接目的語としての働きに加え，談話上での話題化要素としての意味が付加される。また，Top の補部はコメントとしての機能を果たす。(4b)においは，Foc が焦点の対象要素を移動させ，移動した要素は，左周辺部で焦点化要素としての意味が付加される。この場合，Foc の補部は前提（presupposition）としての機能を果たす。左周辺部において，こうした Top や Foc は活性化に応じて随意的に投射される主要部であるが，Force や Fin は音形の有無に関わらず義務的に投射される。

(1)のような疑問文においてはどのようになるのであろうか（(1)を(5)として再録）。

(5)　a. What did John buy yesterday?
　　b. Is he singing?

(5a)では wh 句である演算子 what が Q の指定部に移動され，Q の補部が wh 演算子のスコープとなり，以下の論理形式が形成される。

(6)　For which x, x a thing, [John bought x yesterday]

(5b)の yes-no 疑問文においては，wh 疑問文と対照的に Q の指定部に顕在的な要素が生起することはない。しかし，Radford（2004：220）の報告によると，エリザベス朝の英語では顕在的な疑問詞 whether が CP の指定部（ここでは Q の指定部）に現れ，さらに主語・助動詞倒置が生じていたということである。

(7)　a. Whether had you rather lead mine eyes or eye your master's heels?
　　（Mrs Page, *The Merry Wives of Windsor*, III, ii）
　　b. Whether dost thou profess thyself a knave or a fool?
　　（Lafeu, *All's Well That Ends Well*, IV, v）

この事実はエリザベス朝の英語では，Q の指定部に真偽値に関する演算子 whether が生じ，Q の補部が命題となっていることが分かる。現代英語では，この演算子が空演算子となって生起しているものと考えられる（cf. Baker（1970），Grimshaw（1993），Roberts（1993））。

では，(5)の主語・助動詞倒置，つまり T-to-C の主要部移動はなぜ起こっているのであろうか。Chen（1991,2000），Munemasa（2003）以来分析されているように，(5a)は wh 句が文頭に移動していることで wh 疑問文であることが文タイプ（clause type）として表示され，一方で(5b)では空演算子があることで，文タイプとして yes-no 疑問文であることが分かる。演算子が文頭にあることで文タイプがわかるのであれば，T-to-C 移動は必要ない。実際，インドネシア語（英語と同じく SVO 言語）では wh 疑問文は，wh 句は文頭に移動する（これによって文タイプが表示される）が，英語の主語・助動詞倒置に相当するもの，すなわち T-to-C 移動が以下に示すように存在しない。

(8)　インドネシア語
　　[$_{CP}$ Mengapa [$_{TP}$ dia pergi ke situ]]?
　　why　she go　to there
　　"Why does she go there?"

こうした言語差異はどのようにして捉えればよいのであろうか。この疑問に対する答えを出す前に，先ず(3)の中の Force の具現化について，次節で通言語的な考察を行う。

3．フォース（Force）

前節で見たように，文の左周辺部には ForceP が存在する。この Force の具現化であるが，その具現化について通言語的考察を行ってみよう。

まず，日本語の例からであるが，日本語には Force に相当する小辞（particle）が多数存在する。例えば，疑問文中に生じる「か」がその一例である。次の例は最後に「か」を導入することで，疑問文のフォース標示を行っている。

(9)　君はその本を読みましたか？

小辞の「の」も疑問文のフォースとして標示するが，これは汎用性があり断定文においても使用される。

(10)　A：何を読んでいるの？
　　B：村上春樹の本を読んでいるの。

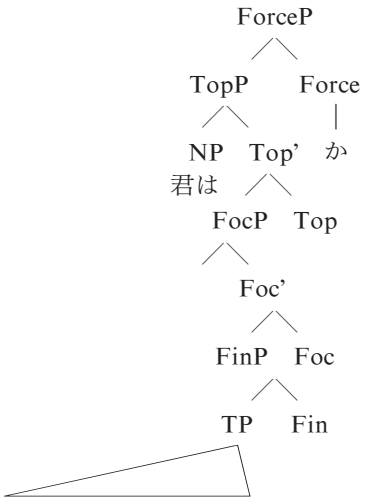
A は疑問文であるが，B は断定文としてフォース標示している。

その他の例としては以下のものがある。

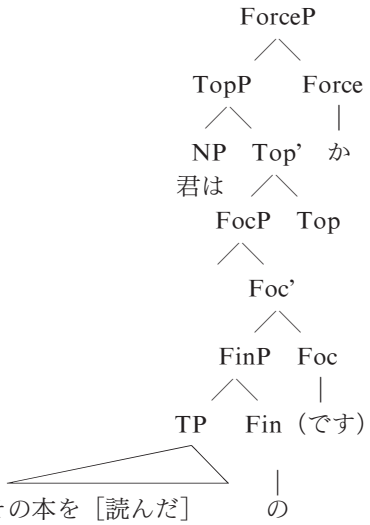
(11)　a. 犯人が逃げているよ。（強調）
　　b. 死んでもしらんぞ。（強調）
　　c. ビールが飲みたいなあ。（願望）
　　d. あのパーティの楽しかったこと！（感嘆）
　　e. あの絵美しいね。（感嘆）
　　f. あの山登ってみたいよね。（勧誘）

こうした一連の小辞は ForceP の主要部に生起していると考えられる。ただ，桒原（2010）は(9)のような疑問文を以下のように分析する（日本語は主要部が後ろに来るため英語と対称的になる）。

⑿



⒀



桒原（2010）の分析によると，⑼のような疑問文は「か」が ForceP の主要部を占め動詞の「読みました」が Fin に移動し，その後 Foc に移動することで，動詞に focus 素性が付与されるため動詞が焦点を担うという。一方，「の」，「です」が導入された場合，⒀のように「の」が Fin の位置を，「です」が Foc の位置を占めるという。

また，Force は小辞が複数ある方が強い傾向にある。

⒁　a. あの子私を叩くの。
　　b. あの子私を叩くの よ。

⒁に関しては，a よりも b の方が Force の度合いが強い。小辞の「の」に関しては地域差があり，九州方言では上記の「の」が「と」になる。

⒂　a. あの子私を叩くと。
　　b. あの子私を叩くと よ。

このように日本語の場合，小辞が豊かであるので Fin，Foc，Force の位置をそれらが占めることは可能である。[1]

次にウエールズ語の例を見てみよう。ウエールズ語は基本語順が VSO である。Roberts（2005）によるとウエールズ語は基本語順がアイルランド語と同じく，vP の中から動詞が T に移動し，VSO 語順を取るという。また，ウエールズ語では文を導入する際，文頭に小辞を置く。例えば，その文が平叙文であれば次の例のように fe 又は mi が文頭に現れる。

⒃　*Welsh*
　　Fe/mi welais i Megan
　　PRT　saw　I Megan
　　“I saw Megan.”

この小辞には日本語と同じく地域差があり，ウエールズの南部では fe を，北部では mi を使用する傾向にあるという。基本は⒃であるが，フォーカスを受ける要素が前置されると小辞の部分が a 又は y が導入されるという。

⒄　a. Y　dynion　a　werthoddy　y　ci.
　　the　man　Prt　sold　the dog
　　“It’ the men who have sold the dog.”
　　b. Ym Mangor y　siaradais i llynedd.
　　in　Bangor Prt　spoke　I last year
　　“It was in Bangor I spoke last year.”

話題化された要素が前置されるとその後に，a が導入される。

⒅　Y dynion a　werthasant y　ci.
　　the man Prt　sold-3pl　the dog
　　“The man, they sold the dog.”

また，wh 移動が生起し，wh 句が文頭に移動すると小辞は a 又は y となる。

⒆　a. I　bwy　y　rhoddodd y　dyn anrheg t?
　　to whom Prt gave　the boy present
　　“To whom did the boy give a present?”
　　b. Pwy　a　welodd Megan?
　　who　Prt saw　Megan
　　“Who did Megan see?”

平叙文，フォーカス，話題化文，wh 疑問文において小辞が生起しているが，これらの例から分かることは，ウエールズ語も日本語と同じく小辞によってフォース標示をしているということである。Roberts（2005）によると，これらの小辞は Fin に生じていると言う。

以上の観察により，フォースは Force 又は Fin に具現すると言うことができる。英語の場合，こうした小辞がないので，フォース標示をするのであれば小辞以外の他の方法が必要になってくる。英語はゲルマン語族，正確には西ゲルマン語に所属する。こうしたフォース標示に関しては，英語だけでなく他のゲルマン語との共時的，通時的比較が必要であるので次節においてその比較を行うことにする。

4．V1及び V2

前節で述べたように，英語は西ゲルマン語に所属する。ゲルマン語は欧印祖語を元に派生した言語であるが，ゲル

マン語はさらに北ゲルマン語，東ゲルマン語，西ゲルマン語へと派生する。北ゲルマン語はアイスランド語，フェロー語，スエーデン語，ノルウエー語，デンマーク語に派生し，東ゲルマン語はゴート語へと派生する。このゴート語は4世紀の聖書にその痕跡を残し，今では死語となっている。西ゲルマン語はドイツ語，オランダ語，フリジア語，西フラマン語，スイスのドイツ語，イデッシュ語，古英語に派生した。

現在，英語を除く上記のゲルマン語に共通するのが動詞第2位（V2）現象である。よく知られているように現代英語ではV2現象は観察されないが，古英語期には存在していた。本稿では，こうした英語のV2現象とその消失について扱うが，まず英語と同じ西ゲルマン語に所属するドイツ語について共時的な考察を行うことにする。

ドイツ語は元となる欧印祖語，さらにオランダ語，フリジア語，古英語と同じく基本語順はSOVである。Holmberg and Platzack (1995)によるとドイツ語を習得する子供はSOVから習得しているという。この語順から次に示すように，ある要素を前置すると次に定形動詞が後続し，V2現象が生じる。

(20) $[XP_{(I)}\ [\ V_{fin}\ [\ldots\ (e_I)\ \ldots\ ]]]$

具体例は次のようになる（例文はHaider (2010)による）。

(21) a. [Ein Maus$_i$ [hat [heute e$_i$ den Käse verschmäht]]]
　　a mouse has today the cheese disdained
　　b. [Den Käse$_i$ [hat [heute eine Maus e$_i$ verschmäht]]]
　　c. [Heute$_i$ [hat [e$_i$ eine Maus den Käse verschmäht]]]
　　d. [Verschmäht$_i$ [hat [heute eine Maus den Käse e$_i$]]]
　　e. [Den Käse verschmäht]$_i$ [hat [heute eine Maus e$_I$]]]

(21a)は主語が前置され，(21b)は目的語，(21c)は副詞類，(21d)は動詞，(21e)は動詞句が前置されている。これら前置された要素は，話題化，焦点化を受けている。

Wh疑問文においてもwh句が前置されると動詞が後続する。

(22) Was$_i$ [will [er uns e$_i$ erklären?]]
　　what wants he (to) us-DAT explain

Yes-no疑問文においては動詞が文頭に移動する。

(23) Hat er das Brot gekauft?
　　has he the bread bought

間接疑問文においてはV2現象は生じない。

(24) Man fragt sich, [was [er uns e$_i$ erklären will]]
　　one ask oneself what he (to) us explain wants

(25) Es ist unklar, ob er sie gekannt hat.
　　it is unclear whether he her known has

このようにドイツ語ではV2現象を示すが，動詞が文頭にくる動詞第1位（V1）現象もある（例文はBrandner (2004)による）。

(26) V1平叙文
　　Sitzt der wieder nur vor dem Fernseher!
　　sits he again only before the TV
　　He is watiching again only TV (and doesn't do anything else).

(27) V1義務(deontic)
　　Soll sie mit ihm doch glücklich warden!
　　shall she with him Prt happy become
　　"Let her be happy with him. I don't care."

(28) V1感嘆文
　　War das ein fröhliches Wiedersehen!
　　was that a happy reunion
　　"This was a (really) happy reunion."

こうしたドイツ語のV1の例では明らかに断定，義務，感嘆といったフォース標示がされている。[2] Yes-no疑問文においてもこうした語順をとるが，yes-no疑問文も疑問のフォース標示が行われる。den Besten (1983)以来，こうした動詞の移動はCPの主要部への移動とされるが，ここでの枠組みにおいては，それはFinへの移動と考えられる（cf. Holmberg (1986)，Weerman (1988)，Rizzi (1990)，Vikner (1995)等）。

ドイツ語では，左方転移(left dislocation)とwh疑問文またyes-no疑問文を同時に行うことができる。

(29) a. Den Käse$_i$, wann hat die Maus den$_i$ gefressen?
　　the-ACC cheese when has the mouse that-ACC eaten
　　b. Den Käse$_i$, hat die Maus den$_i$ gefressen?
　　the-ACC cheese has the mouse that-ACC eaten

(29a)において，Den Käseは左周辺部のTopの指定部に，wannはQの指定部に入っていると考えられる。(29b)では同じくDen KäseがTopの指定部に入り，wh疑問詞がない状態で動詞が後続している。こうした例は動詞がFinへ移動していることを示唆している。

ここで(21)，(22)のV2の例を考えてみると，文頭に前置された要素に動詞が後続しているが，この動詞は上記のようにFinへ移動している。この動詞の移動によってV1と同じくフォース標示がされるので，V2も同じくフォース標示がされているということになる。前節で見たように，日本語，ウエールズ語ではフォース標示のために小辞を使用できるが，ドイツ語ではそうした小辞が存在しない。そのため，フォース標示の最後の手段として動詞をFinに移動させると考えられる。つまり話題化，疑問，断定，感嘆等それぞれのフォースが関わる場合，それらが活性化すると副作用としてFinに動詞が移動してくるということである。

次に，補文でのV2について見てみよう。ドイツ語では補文でのV2は可能であるが，補文標識のdassが導入される

と V2が生起できない。

(30) a. Watoson behauptete, dises Geld hatte Moriarty gestohlen.
Watoson claimed this money had Moriarty stolen
b. Watoson behauptete, dass Moriarty dises Geld gestohlen hatte.
"Watoson claimed (that) Moriarty had stolen this money."

一方で，SVO 言語であるデンマーク語においては，主節と同じく補文でも V2現象を起こす。ただ，デンマーク語ではドイツ語と異なり，V2を起こしても起こさなくとも補文標識が義務的に導入される。

(31) Vi ved...
We know...
a. [at [denne bog_i har_j [Bo ikke t_j læst t_i]]]
that this book has Bo not read
b. [at [Bo_i har_j [t_i ikke t_j læst denne bog]]]
that Bo has not read this book
c. [at [Bo ikke har læst denne bog]]
that Bo not has read this book

(31)の例では，at は Force に生起していると考えられる。(31 a,b)では V2が生起しているが，これはフォース標示のため動詞が Fin に移動していると考えられる。しかし，(31c)では V2が生起していないので，フォース標示は行われていないことになる。

デンマーク語では，上記のように補文標識 at があってもフォース標示が可能であるが，これは Force に at が生起しているためであろう。ドイツ語においては補文標識の dass が Fin に導入され，それによって Fin への動詞移動が阻害され，V2が生起できないと考えられる。

また，V2の生起に関しては補文を導入する動詞の性質によって影響を受ける。通常，架橋動詞（bridge verb）の補文では V2は生じるが，叙実動詞(factive verb)の補文では V2は生起できない。ドイツ語はその対照性を示す。

(32) a. *Johan bedauert, dieses Buch habe ich gelesen.
John regrets this book have I read
b. Johan bedauert, dass ich dieses Buch gelesen habe.

デンマーク語においても同じである。

(33) a. *Johan beklager at denne bog har jeg læst.
John regrets that this book have I read
b. Johan beklager at jeg har læst denne bog.
Johan regrets that I have read this book

フェロー語においても同じことが言える。

(34) a. *Jón er keddur av at hesa bók havi eg lisið.
John regrets that this book have I read
b. Jón er keddur av at eg havi lisið hesa bók
John regrets that I have read this book

叙実動詞はその補文に前提となる命題を取るが，前提は既に定まった命題であるため，フォースを介在させることはできない。このため，叙実動詞の補文には V2が生起できないのであろう。

しかし，アイスランド語やイディシュ語では叙実動詞の補文においても V2現象が生じる。

(35) アイスランド語
Jón harmar að þessa bók skuli ég hafa lesið.
John regrets that this book shall I have read

(36) イディシュ語
Jonas bedoyert az dos bukh hob ikh geleyent.
John regrets that this book have I read

これらの言語では，前提となる命題に対してもフォースを介在させるという，過度の生成（overgeneralization）によるものと考えられる。

最後に wh 疑問文の V2現象について見てみよう。英語においては wh 疑問文の場合，前置された疑問詞の後に do 等の助動詞が後続する。Do 支持（*do*-support）と呼ばれるものであるが，これは中英語期に導入された英語独自の現象であり，他のゲルマン系の言語では全く観察されない。[3] Wh 移動に伴う V2はここでの分析では，疑問のフォース標示のためのものである。ただ，これは主節に限定され，埋め込まれた間接疑問文では生じない。これは英語だけでなく他の全てのゲルマン系の言語にもあてはまる。

(37) ドイツ語
Ich weiß nicht warum die Ku im Zimmer gestanden ist.
I know not why the cow in the room stood has

(38) デンマーク語
Jeg ved ikke hvorfor koen har stået i værelset.
I know not why the cow has stood in the room

これに関しては主節の動詞の選択性と関連がある。埋め込まれた間接疑問文は主節の動詞に選択(selection)されている。従来の分析では，主節の動詞はそれがとる間接疑問文の CP の主要部を Q と選択する。ここでの分析では主節の動詞によって疑問のフォースが選択され，それに伴って Fin に動詞移動が生じる。ただし，間接疑問文は埋め込み文であるため，主節と比較すると疑問のフォース標示が直接的ではない。このことは英語を習得する子供の発話と比較してみると分かりやすい。

英語の疑問文を習得している子供の発話には通時的な言語差があり，言語習得のそれぞれの段階で異なった疑問文のパターンが観察される。英語を習得している子供は生後20～24ヶ月たつと，単一の語だけでなく複数の語を統語的に組み合わせて発話を行うようになる。およそこの時期より，子供は文尾に上昇調のイントネーションを加えることで yes-no 疑問文を発する。次の疑問文の習得の段階として，(39)のように Is や Are といった疑問不変化詞を文頭に付加することで yes-no 疑問文を表現する。この段階では，(40)のように wh 疑問文では主語・助動詞倒置は生じない。

(39) a. Is I can do dat? Is Ben did go dere?
b. Are you put this on me? Are this is broke?

(40) a. How dat opened?
　　b. What you doing?

その後，主語・助動詞倒置を伴った yes-no 疑問文や wh 疑問文を使用するようになる。子供の中には，wh 疑問文に主語・助動詞倒置を行う前に yes-no 疑問文に倒置を行い，その後 wh 疑問文に倒置を施すものもいれば，同時に両方の疑問文に倒置を施すものもいる（Weinberg（1990）参照）。

(41) a. Can you do that?　Is Ben going there?
　　b. How the door opened?　What are they doing?

その後，埋め込み疑問文を習得する時期が来ると，その疑問文中で主語・助動詞倒置を行う。

(42) a. I wonder［can I find the bottle］
　　b. Do you know［who is she］?

これはいわゆる Lightfoot（1989，1991）が言う degree-zero learnability と呼ばれるもので，埋め込み文を習得する際に主節の現象を参考とするものである。ここでの分析では，主節の動詞によって埋め込み疑問文が選択され，それによって疑問のフォース標示が行われるが，間接疑問文は直接疑問文と比較すると疑問のフォースが直接的でないため，Fin への動詞移動が憚れる。直接的ではなく間接的であるため，子供は間接疑問文において主語・助動詞倒置を行わなくなる。[4]

しかし，間接疑問文での主語・助動詞倒置を文法化してしまう場合もある。英語の方言でベルファスト英語やハイバーノ英語には以下のように間接疑問文で主語・助動詞倒置を行う（Grimshaw（1979），McClosky（1992），Cheng（1991），Weverink（1991），Rivero（1994），Henry（1995），Munemasa（2003）など参照）。

(43) a. Ask your father does he want his dinner.
　　b. I was wondering would he come home for the Christmas.
　　c. They asked who did we see.
　　d. I wonder what did John think would he get.

ドイツ語においても，CHILDES（Child Language Data Exchange System）のドイツ語コーパス（Nijmegen corpus，Wagner corpus）を見ると，補文を習得している子供が間接疑問文に V2を起こす例も見られる。標準英語においては，こうした間接疑問文での V2の文法化は行われず，他のゲルマン系の大人の言語でも行われない。ベルファスト英語やハイバーノ英語では，標準英語を習得している子供の文法と同じく，間接疑問文において過度の生成を行っているのである。

以上，ドイツ語の V1現象からフォース標示として Fin への動詞移動の可能性を確認し，その拡張として V2現象があることを見た。ドイツ語等のゲルマン系の言語においては，フォース標示をする小辞がないため Fin への動詞移動によってその標示を行う。この移動は従来の分析では V-to-T-to-C 移動と見做されるものであるが，左周辺部のカートグラフィーでは，C ではなく Fin への移動であり，この移動によってフォース標示が行われる。Focus と Fin は常に存在するが，それ以外の範疇はその活性化によって随意的に導入され，指定部にそれと関連する要素を引き付ける。

(44) ［Force P［TopP*［FocP［TopP*［Q［FinP［TP
　　［vP …　　↑
　　Force Marking

話題化，焦点化，疑問文はそれに関連する要素が左周辺部に移動した場合，それぞれのフォース標示として Fin に動詞を移動させる。これがゲルマン系の言語に観察される V2現象である。

V2現象は wh 疑問文，話題化，焦点化において観察されるが，英語においては V2現象は wh 疑問文，否定辞倒置に限定され，話題化，焦点化では観察されない。次節では，この限定化に関して通時的な分析の基に説明を与えることにする。

5．通時的差異

前節で述べたようにゲルマン系の言語の中で英語だけは V2を持たないが，その代わりに残余の V2（residual V2）を持つ。

(45) a. What did he buy yesterday?
　　b. Never before has he read such a good article.

しかし，現在のゲルマン系の言語のように英語も古英語期には V2があった。Andrew（1940）の分類によると主節では SVO が基本，従属節では SOV が基本であるという。その主節での V2の具体例は以下の通りである。

(46) wh 疑問文
　Hwi wolde God swa lytles　þinges him forwyrnan?
　why would God so　small　thing　him deny
　“Why should God deny him such a small thing?”
　（*Ælfric's　Catholic　Homilie* I, l.14.2, Fischer et al.（2000: 106））

(47) 否定辞倒置
　Ne　sceal he naht　unakiefedes don
　not　shall he nothing unlawful　do
　“He shall not do anything unlawful”
　（*King　Alfred's　West　Saxon　Version　of　Gregory's　Pastoral　Care*, 10.61.14, Fischer et al.（2000: 106））

(48) 指示副詞　þa
　Þa wæs　Þæt folc　Þæs micclan welan　ungemetlice
　then was the people the great prosperity　excessively
　brucende...
　partaking
　（*The Old English Orosius*, 1.23.3, Fischer et al.（2000: 106））

(49) yes-no 疑問文
　Hæfst　Þu ænigne geferan?
　“Have you any companions?”

（*Ælfric's Colloquy*, 28, Fischer et al.(2000: 106)）

古英語期において，(46)のように wh 疑問文では現在のゲルマン系の言語と同じく V2を起こす。(47)のように否定辞が前置された場合，それに動詞が後続し V2が起こる。文頭に指示副詞 Þa が導入された場合，(48)のように V2が起こる。この指示副詞には他に，Þonne，Þær がある。Yes-no 疑問文の場合，(49)のように文頭に動詞が生じる。ここでの分析では，(46)の wh 疑問文の場合，wh 句が Q の指定部に入り，疑問のフォース標示のため Fin に動詞が移動する。(47)の場合，否定辞は強調されているので Foc の指定部に否定辞が入り，動詞が Fin に移動し焦点化に関するフォース標示を行っていることになる。(48)においては，指示副詞 Þa も強調されているため，同じく Foc の指定部に入り，焦点化のフォース標示のため Fin に動詞が移動する。(49)の場合，Fin に動詞が移動して疑問のフォース標示を行っている。

さらに古英語では話題化においても，以下に示すように V2が生じていた。

(50) On twan þingum hæfde God　þæs mannes　sawle gegodod
in　two　things had　God　the　man's　soul endowed
"With two things God had endowed man's soul."
（*Ælfric's Catholic Homilie* I, 1.20.1, Fischer et al. (2000: 114)）

ここでの分析では，話題化された要素は Top の指定部に入り，話題化のフォース標示のため動詞が Fin に移動している。ただ，こうした話題化における主語が名詞句であれば上記のように V2となるが，それが代名詞の場合話題化された要素-代名詞主語-動詞という語順になり，いわゆる V3現象が生じる。

(51) hiora untrymnesse he sceal ðrowian on his heortan
their weakness　he shall　atone　in his heart
"He shall atone in his heart for their weakness."
（*CP* 60.17, Pintzuk (1999: 136)）

こうした現象に対し，Kemenade (1999) は CP と TP の間に FP という投射範疇を設け説明を試みている。

(52) $[_{CP}$ hiora untrymnesse$_i$ $[_{FP}$ he$_j$ $[$ sceal$_K$-F$]$ $[_{TP}$ t$_K$ $[_{VP}$ t$_j$ t$_k$ ðrowian t$_i$ on his heortan $]]]]$

この分析では，話題化された要素は CP の指定部に入り，代名詞主語は FP の指定部に入り，動詞が FP の主要部に移動する。名詞句主語の場合，FP の指定部に入らず，TP の指定部に入るという。しかし，この分析では代名詞主語を FP の指定部に固定しているため，以下のような例を説明できない。

(53) & ic gehwam wille　þærto taecan
and I everyone will　thereto direct
"And I will direct everyone there..."
（*Or*, 57.15, Pintzuk (1999: 171)）

(53)では話題化された要素の右に主語代名詞が生じている。Pintzuk (1999) はこうした現象に対して代名詞が接辞であると考え説明を与えている。接辞である代名詞は名詞の左あるいは右に付加することができ，(53)の例では話題化された要素の左に付加していると考える。(51)の例では，話題化された要素の右に主語代名詞が付加している。さらに Pintzuk (1999) は Kemenade (1999) と異なり，話題化された要素は IP (TP) の指定部に生じ，動詞はその主要部に生起すると考えている。

ここでの分析では，上記の V3現象は動詞の左に生じる要素は話題化されたものと判断できるため，それらは Top の指定部に入る。Top は複数の要素を収容できるため，(51)のように話題化された要素＋主語代名詞，あるいは(53)のように主語＋話題化された要素という語順であることも説明が可能である。

前述のように古英語期では SVO，SOV の語順が可能であったが，次第に SOV は廃れ SVO の語順が支配的になる。Kemenade (1987) によるとそれはおよそ1200年頃であるという。こうした初期中英語では wh 疑問文，否定辞倒置，指示副詞の前置では V2が観察される。具体例は以下の通りである（例文はすべて Kemenade (1997) からのものである）。

(54) a. Hweonone cumest tu ...
whence　come　you
"When do you come from..."
b. Ne mei ich he seið. Nohwer speoken
not may I　he says nowhere speak
"I may not, he says, speak anywhere."
c. Ðanne wunest ðu sikerliche on Gode
then　abide　you truly　in God
"Then you abide truly in God."

しかし，Kemenade (1987) によると，V2は一部の現象に見られなくなり，それは15世紀の後半であるという（Kemenade (1997)，Roberts (1993)，Kroch and Taylor (1997)，Warner (1997) 等参照）。

(55) a. But in　þis world　þe beste lif for prestis is holy life
but in this world the best life for priests is holy life
b. Certis　þei ben opyn foolis
certainly they are open fools

(55)は話題化又は焦点化の例であるが，V2がなく現代英語の特徴を示している。この事実をどのように捉えるかが問題となる。ここでの分析では話題化に関しても話題化に関するフォースが生じ，Fin に動詞が移動することでその標示が行われる。疑問文であれば疑問のフォース（interrogative force）が生じると言えるが，話題化又は焦点化の場合は平叙文でのフォースである。ということは，英語では平叙文のフォースが15世紀の後半に消失したと言うことができる。

以上，通時的に英語の V2現象について見てきた。英語で

は古英語期，初期中英語にはV2現象が見られたが，一部の現象に関してV2が消失した。その消失は平叙文のフォースと言えるが，この消失には循環性がある。次節ではこの循環性について考察する。

6．フォースの循環性

前節では，英語のV2の消失について通時的考察を行った。その消失は平叙文に関するフォースの消失であるが，その消失は一気に行われたものではなく循環的に行われている。本節ではこの循環性について考察を行う。

V2はV-to-T-to-C移動であるが，言語の中には平叙文においてV-to-T移動を行うものがある。フランス語がそれに相当する。

(56) a. Jean embrasse souvent Marie.
　　John kisses　often　Mary
　　b. Jean (ne) mange pas de chocolat.
　　John　eats　not chocolate
　　c. Les enfants mangent tous le chocolat.
　　the children eat　all　chocolate

(56a)は副詞souventの左に動詞があり，(56b)はpasの左に動詞があり，(56c)は遊離数量詞tousの左に動詞がある。その副詞，否定詞pas，遊離数量詞はVPに付加しているため，それらの左にある動詞はV-to-T移動を行っていると考えられる。

こうしたV-to-T移動は中英語期には頻繁に生起している。(57)がその一例である。

(57) a. Plinie reporteth that griphes flie alwaies to the place of slaughter.
　　(R. Scot *Discov. Witchcr*. xi. xiii. (1886) 162, *OED*)
　　b. In doleful wise they ended both their days
　　(Marlowe, *The Jew of Malta*, III, iii, 21, Roberts (1993: 253))
　　c. He come not in company.
　　(*Cursor M*. 17288 *Resurrection* 163 (Cott.), *OED*)

(57)のaでは，副詞alwaysの前に，bの例では浮遊数量詞bothの前に，cの例では否定辞notの前にそれぞれ動詞が生起している。これらの例はV-to-T移動の具体例であるが，こうした動詞の移動は16世紀の後半にはほぼ消失しており（Roberts (1993)参照），現在の英語では全く観察されない。

(58) 15th century
　And the erthe and the lond chaungeth often his color.
　And the earth and the land changes　often its color
　(*Mandeville's Travels* ix.100, *OED*)

(59) 16th century
　Worldly chaunces..in adversitye often chaunge from evell to good and so to bettre.
　(Hall, *Chronicle of Henry VII*, 8, *OED*)

V-to-T移動の消失に関しては様々な意見が出されているが，それを英語の屈折形の消失と結びつける分析が多いようである。古英語期では動詞はその活用の仕方によって，強変化動詞と弱変化動詞に区別されていた。(60)は強変化動詞drifan（drive）と弱変化動詞fremman（perform）の活用変化である。

(60) a. drifan

Sg.	1	drife	Pl.	1	drifað
	2	drifst		2	drifað
	3	drifð		3	drifað

b. fremman

Sg.	1	fremme	Pl.	1	fremmaþ
	2	fremest		2	fremmaþ
	3	fremeþ		3	fremmaþ

古英語期の屈折はこのように豊かであったと言えるが，中英語期には強変化動詞の大部分が弱変化動詞に移行し，強変化動詞の屈折型の間でも平準化（leveling）の傾向があり，屈折が減少している。

フランス語は前述のようにV-to-T移動が顕在化する言語として知られている（Pollock (1989)，Chomsky (1991)参照）。英語と比較するとフランス語は屈折が豊かな言語であり，それ故V-to-T移動を誘発すると考えられるが，屈折の豊かさがV-to-T移動と関連していることがWeissenborn (1988)，Pierce (1989，1992)，Déprez and Pierce (1993)，Wexler (1994) 等で議論されている。Pierce (1989) によると，フランス語を習得している20〜30ヶ月の子供が，定形の動詞と屈折のない非定形の動詞を発話する場合，定形の動詞の場合は大人の文法と同じく，V-to-T移動を起こした文を発話し，非定形の動詞を含む場合，V-to-T移動がない文を発話するという。

(61) ［−finite］verbs
　a. pas manger la poupée
　　not eat　the doll
　b. pas tomber bébé
　　not fall　baby

(62) ［＋finite］verbs
　a. Patsy est pas lá-bas
　　Patsy is　not down there
　b. marche pas
　　walks　not

しかし，どの程度の屈折の豊かさがV-to-T移動と結びつくかは議論の余地がある。Kosmeijer (1986)，Holmberg and Platzack (1991)，Platzack (1988)，Platzack and Holmberg (1989)，Roberts (1993)，Vikner (1994) 等において屈折の豊かさとV-to-T移動の連関について興味深い議論が行われているが，これらの議論の要点としては，単数又は複数形のどちらかのグループにおいてその中で屈折の区別がほぼ無くなってしまっている場合，V-to-T移動がないということである。

(63) *throw*, infinitive and present indicative

		Icelandic	Faroese	Danish	Älvdalsmålet	Hallingdalen
Inf.		kasta	kasta	kaste	kasta	kastæ
Sg.	1	kasta	kasti	kaster	kastar	kasta
	2	kastar	kastar	kaster	kastar	kasta
	3	kastar	kastar	kaster	kastar	kasta
Pl.	1	köstum	kasta	kaster	kastum	kastæ
	2	kastið	kasta	kaster	kaster	kastæ
	3	kasta	kasta	kaster	kasta	kastæ

（Vikner（1994: 119–120））

(63)において V-to-T 移動がある言語はアイスランド語と Älvdalsm å let であり，単数あるいは複数の屈折形のグループにおいてそれぞれの人称がほぼ区別されている。しかし，他の言語ではそうした区別が明確でなく，V-to-T 移動を容認していない。

(64)

		French	English	English(c1400)	English（c1500）
Sg.	1	jette	throw	caste(e)	cast
	2	jettes	throw	castest	castest
	3	jette	throws	casteth	casteth
Pl.	1	jetons	throw	caste(n)	cast(e)
	2	jetez	throw	caste(n)	cast(e)
	3	jettent	throw	caste(n)	cast(e)

(64)はフランス語と英語の屈折形であり，フランス語では単数そして複数の屈折形のグループにおいて，それぞれの人称が区別されているため V-to-T 移動があるが，現代英語においては 3 人称単数の屈折が単数のグループにあるだけで，それ以外は屈折形が同じで区別がつかない。しかし，V-to-T 移動を示す16世紀後半までの英語では，単数形のグループにおいてそれぞれの人称が区別され，従って V-to-T 移動が観察されるということができる。

Biberauer and Roberts（2010）は動詞移動と空主語の関係を扱い，動詞の屈折を空主語に関する屈折と V-to-T 移動に関する屈折との二つの関係に分割することを提案している。また，彼らは屈折を一致屈折と時制屈折に分け，一致屈折が空主語を認可し，時制屈折が動詞移動を誘発すると主張して，以下のような分類をしている。

(65) a. Rich agreement and rich tense inflection: hence V-to-T and null subjects, e.g. Italian, Greek, Spanish, etc.
b. Poor agreement but rich tense: hence V-to-T, but no null subjects, e.g. French
c. Poor tense and poor agreement: hence no V-to-T and no null subjects, e.g. Modern English, Mainland Scandinavian
d. Rich agreement and poor tense: null subjects, but no V-to-T; no clear example...

フランス語では以下に示すように時制の形態素が豊かである。

(66) donner（donate）

現在	il donne	複合過去	il a donné
半過去	il donnait	大過去	il avait donné
単純過去	il donna	前過去	il eut donné
単純未来	il donnera	前未来	il aura donné

確かに時制の形態が豊かであるため，フランス語は V-to-T 移動が可能であると言える。

しかし，屈折が豊かであることの定義に関してはあいまいなところがあり，何をもって豊かとするかである。Vikber（1997）によると SVO 言語に全ての時制に人称形態素が現れる場合豊かな一致が見られるとのことである。

しかし，フェロー語（SVO 言語）は，前述のように一致の屈折は豊かではない。さらに次に示すように時制の屈折も豊かではない。

(67) フェロー語

a. svimja(swim)

		Present	Past
Sg.	1	svimji	savam
	2	svimur	svamst
	3	svimur	svam
Pl.	1	svimja	svumu
	2	svimja	svumu
	3	svimja	svumu

b. kalla (call)

		Present	Past
Sg.	1	kalli	kallaði
	2	kallar	kallaði
	3	kallar	kallaði
Pl.	1	kalla	kallaðu
	2	kalla	kallaðu
	3	kalla	kallaðu

しかし，こうした状況にも関わらずフェロー語では下記にあるように V-to-T 移動を示す。

(68) a. Tórdis sigur, at dreingirnir hava ikki málað húsið.
Tordis says that boys-the have not painted house-the
b. Tórdis sigur, at dreingirnir ikki hava málað húsið.
Tordis says that boys-the not have painted house-the

（Jonas（2002: 258））

Jonas（2002）によるとこれには方言差があり，V-to-T 移動を許す方言とそうでない方言があり，南部の方言では V-to-T 移動を容認するということである。また，方言でなくとも比較的若い世代は V-to-T 移動を示さないということである。

また，Bobaljik（2001）や Thráinsson（2003）の報告によると，一致形態素が豊かでない(69a)のスエーデン語のクロ

ノビー方言や，(69b)のノルウエー語のトロムソ方言では V-to-T 移動が観察される。

(69) a. He va bra　et an tsöfft　int bootse,
it was good that he bought not book-the
"It was good that he didn't buy the book."
b. Vi vå bare tre støkka før det at han Nielsen kom ikkje. we were only three pieces for it that he Nielsen came not
"There were only three of us because Nielsen didn't come."

上記のことから一致形態素の豊かさが動詞の移動と関連しているとは言えない。ではどうして英語に V2が消失し，続いて V-to-T 移動が消失したのであろうか。考えられるのはフォース標示の際の Fin への動詞移動の牽引力の弱化である。古英語期にはフォース標示のため Fin に動詞が移動する。実際，古英語ではドイツ語と同じく V1が観察されていた。

(70) Com　þa to lande lid-mamma helm（Beo 1623）
came then to land　sailors　protector
"Then the protector of the sailors came to the shore."
（Hinterhölzl and Petrova（2010: 310））

さらに古高地ドイツ語においても V1が観察されている。

(71) Was liutu filu in flize, in managemo agaleize（O I 1,1）
were people many in diligence in great effort
"There were many people in ddiligence, in great effort."
（Hinterhölzl and Petrova（2010: 310））

こうした V1は narrative inversion と呼ばれているが，フォース標示が行われていることは明らかである。これに何らかの要素が前置されると V2が生じる。しかし，Fin への動詞牽引力が減退し，15世紀の後半までには T までしか上がってこなくなる。この段階では V-to-T 移動はまだ存在する。T がフォース標示されていたことは名残りとして，現代英語で次のような文で強調が生じることからも分かる。

(72) He did do it.

一致形態素の豊かさと V-to-T 移動を結びつける分析では，現代英語のように一致形態素がほぼなくなった時期においても V-to-T 移動は存在していたので，一致形態素の豊かさに重きを置く分析は説明力に欠ける。そして時間の経過とともにさらに動詞の牽引力が及ばなくなり，16世紀の後半には V-to-T 移動が消失する。このように英語においては Fin への動詞移動の牽引力が循環的に衰退して行ったのである。

Fin への動詞移動の牽引力が減退して行くという予測は他の言語にもあてはまる。Roberts（1993）によると，古フランス語では古英語そして古高地ドイツ語と同じく V1そして V2を示していたということである。

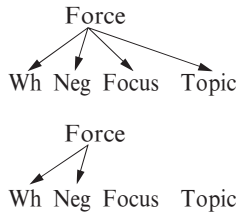
(73) 古フランス語　V1
Voit le　li　rois
Sees him the king

(74) 古フランス語　V2
Or　voi　ge bien, plains es　de mautalant
Now see　I　well full　are(you) of bad intentions

フランス語は SVO 言語であるが，上記のように古フランス語は V1, V2を持っていることから，英語と同じく当時は Fin に動詞が移動し，フォース標示していたことが分かる。しかし，現代フランス語では V2は消失しているが，V-to-T 移動は存在する。つまりこれは Fin への動詞移動の牽引力が時間の経過とともに T までしか及ばなくなったことを意味している。英語は平叙文において V-to-T 移動を失った言語であるが，フランス語はまだ T への動詞牽引力を保持している言語であるということである。[5]

これまで見てきた英語の V2の消失は，話題化，焦点化の場合である。英語においては前述のように，wh 疑問文や否定辞倒置では残余の V2（residual V2）を持ち，V2は存続している。これは文法化の一つと考えられる。例えば，迂言の do の文法化を考えてみると，Ellegård（1953）の古典的分析によれば，do は中英語期に最初は脚韻と整えるため韻文で用いられ始めたという。また，使役動詞の働きを持つ時期があり，その後ろに目的語＋原形不定詞という形をとっていた。その後目的語が省略されるようになり，後ろに来る原形不定詞の意味上の主語が分からなくなっていく。さらに make や let などの使役動詞との競合で次第に使用されなくなる。その後，Samuels（1972）が言うように，未完了相・進行相を表すアスペクト・マーカーとして用いられるようになるが，文法化には至らなかった。しかし，今日イギリス南西部のサマセット及びドーセット方言では肯定平叙文において反復的あるいは習慣的行為を表すアスペクト・マーカーとして文法化されている。後の16世紀以降には，疑問文や否定文，命令文に do が使用されるようになる。このように do はある機能が文法化されたり消滅したりする過程を経ている。

(75)



これと同じく，話題化，焦点化における V2の消失は，それらが Fin への動詞移動と結びつかなくなった一種の文法化の結果である。

7．結語

本稿ではカートグラフィーに基づき V1, V2, V-to-T 移動及びそれらの通時的消失について考察した。言語を通してフォースが生じた場合，左周辺部の Fin に（助）動詞が移動しその標示が行われる。V1はその一例である。Wh 疑問文では wh 句が Q の指定部に移動し，疑問のフォース標示のため Fin に（助）動詞が移動する。否定辞倒置，焦点化，話題化においてもフォースが生じ，Fin に動詞が移動する。これがゲルマン系言語に見られる V2のメカニズムである。英語においては，V2は古英語期より観察されたが，それは15世紀の後半に，話題化，焦点化において V2が消失する。これは当該の現象がフォースと結びつかなくなり，Fin への動詞移動が消失した帰結である。以後，平叙文においてはフォース標示に伴う動詞の牽引力が T までしか及ばなくなり，動詞移動が T までとなる。その後，T までも動詞の牽引力が及ばなくなり，それによって16世紀の後半に V-to-T 移動が消失し現在に至る。従来の一致の豊かさに依拠する分析はこうした循環的動詞移動の現象に対して難点があった。しかし，ここでのフォースに基づいた分析は循環的動詞移動の現象だけでなく，他の言語の循環的動詞移動の通時的変遷に対しても直接的且つ統一的説明が可能になる。

本稿では動詞の移動（主要部移動）に焦点をあて分析を試みた。しかし，Chomsky（2013，2015）では主要部移動は外在化されたものであり，普遍文法を形成する narrow syntax では扱われないことが示唆されている。これに従えば，主要部移動は併合によって構築されたものが転送（transfer）された後に生じるものであるということになる。つまり PF または Halle and Marantz（1993）以降提案されている，統語構造に基づき，形態操作，語彙挿入，音韻規則を適用する分散形態論（distributed morphology）で扱うべきものであるかもしれない。この展開に関しては今後の課題としておく。

注

[1] 中国語においてもフォース標示できる小辞が存在する。疑問の小辞に ma または ne があり，断定，承認，同意を表す a がある。韓国語においても平叙文をフォース標示する ta があり，疑問文では nunya, aya がある。こうした二つの言語では日本語と比較するとフォース標示する小辞の数は少ない。

[2] イデッシュ語，アイスランド語においてもこうした V1現象が観察される。

i）イデッシュ語

Hot men geheysn shisn.
has one ordered to shoot
“So the order was given to shoot.”
（Santorini（1989: 61））

ii）アイスランド語

Kom Ólafur seint heim.
came Ólafur late home
“Ólafur came home late.”
（Sigurðsson（1990: 41））

[3] ロマンス系の言語で，イタリアの方言に wh 移動に加え do 支持と同じ操作を伴うものがある。詳細に関しては Benincà and Poletto（2004）を参照。

[4] 子供の言語習得の中間段階で示す疑問文に関する一連のデータは，Roeper（1990），Inada（1997），Inada and Imanishi（1997），Radford（1990，1995）などの報告によるものである。

[5] これに関連して，Jonas（2002）によると古スコットランド語は V2を示していたが，まず V2を失い次に V-to-T 移動を失ったということである。これは英語との言語接触によるものと分析している。

参考文献

Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (1998) “Parametrizing AGR: Word Order, Verb-movement and EPP-checking,” *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491–539.

Andrew, S.O. (1940) *Syntax and Style in Old English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Authier, J.-Marc (1992) “Iterated CPs and Embedded Topicalization,” *Linguistic Inquiry* 23, 329–336.

Baker, Carol Leroy (1970) “Notes on the Description of English Questions: the Role of an Abstract Question Morpheme,” *Foundation of Language* 6, 197–219.

Bayer, Josef (1996) *Directionality and Logical Form*, Kluwer, Dordrecht.

Benincà, Paola and Cecilia Poletto (2004) “A Case of *do*-support in Romance,” *Natural Language and Linguistic Theory* 22, 51–94.

Bhatt, Rajesh (2005) “Long Distance Agreement in Hindi-Urdu,” *Natural Language and Linguistic Theory* 23, 757–807.

Biberauer, Theresa and Ian Roberts (2010) “Subjects, Tense and Verb-movement,” *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*, ed. by Theresa Biberauer, Anders Holmberg, Ian Roberts, Michelle Sheehan, 263–302, Cambridge University Press, Cambridge.

den Besten, Hans (1983) “On the Interaction of Root Transformation and Lexical Deletive Rules,” *On the Formal Synatax of the Westgermania*, ed., by Werner Abraham, 47–131, John Benjamins, Amsterdam.

Bobaljik, Jonathan D. and Susi Wurmbrand (2003) "Long Distance Object Agreement, Restructuring and Anti-Reconstruction," *Proceedings of the North East Linguistic Society* 33, 67–86.

Brandner, Ellen (2004) "Head-movement in Minimalism, and V2 as FORCE-marking," *The Syntax and Semantics of the Left Periphery*, ed. by Horst Lohnstein and Susanne Trissler, 97–138, Mouton de Gruyter, Berlin.

Chen, Lisa Lai-Shen (1991) *On the Typology of WH-Questions*, Doctoral dissertation, MIT.

Cheng, Lisa Lai-Shen (2000) "Moving Just the Feature," *Wh-scope Marking*, ed. by Uli Lutz, Gereon Müller, and Arnim von Stechow, 77–99, John Benjamins, Amserdam.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, ed. by Robert Freidin, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," *Interfaces + recursion = language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1–29, Mouton de Gruyter, Berlin.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33–49.

Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies, and Beyond*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.

Chung, Sandra and James McCloskey (1987) "Government, Barriers, and Small Clauses in Modern Irish," *Linguistic Inquiry* 18, 173–237.

Culicover, Peter (1991) "Topicalization, Inversion, and Complementizers in English," ms., The Ohio State University.

Déprez, Viviane and Amy Pierce (1993) "Negation and Functional Projections in Early Grammar," *Linguistic Inquiry* 24, 25–68.

Doherty, Cathal (1997) "Clauses without Complementizers: Finite IP-complementation in English," *The Linguistic Review* 14, 179–220.

Doherty, Cathal (2000) *Clauses without "That": The Case for Bare Sentential Complementation in English*, Garland, New York and London.

Ellegård, Alvar (1953) *The Auxiliary Do: The Establishment and Regulation of its Use in English*, Almqvist & Wiksell, Stockholm.

Epstein, Samuel David and Daniel T. Seely (2006) *Derivations in Minimalism*, Cambridge University Press, Cambridge.

Erteschik, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.

Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Grimshaw, Jane (1979) "Complement Selection and the Lexicon," *Linguistic Inquiry* 10, 279–326.

Grimshaw, Jane (1993) "Minimal Projection, heads, and Optimality," ms., Rutgers University.

Grimshaw, Jane (1997) "Projection, Heads, and Optimality," *Linguistic Inquiry* 28, 373–422.

Haeberli, Eric (2003) "Categorial Features as the Source of EPP and Abstract Case Phenomena," *New Perspectives on Case Theory*, ed. by Ellen Brandner and Heike Zinsmeister, 89–126, CSLI, Stanford.

Hagstrom, Paul (1998) *Decomposing Questions*, Doctoral dissertation, MIT.

Haider, Hubert (2010) *The Syntax of German*, Cambridge University Press, Cambridge.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 111–176, MIT Press, MIT Press, Cambridge, MA.

Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard Eng-*

lish: Dialect Variation and Parameter Setting, Oxford University Press, Oxford.

Hinterhölzl, Roland and Svetlana Petrova (2010) "From V1 to V2 in West Germanic," *Lingua* 120, 315–328.

Holmberg, Anders (1986) *Word Order and Syntactic Features in the Scandinavian Languages and English*, University of Stockholm, Stockholm.

Holmberg, Anders (2000) "Scandinavian Stylistic Fronting: How Any Category Can Become an Expletive," *Linguistic Inquiry* 31, 445–483.

Holmberg, Anders and Christer Platzack (1991) "On the Role of Inflection in Scandinavian Syntax," *Issues in Germanic Syntax*, ed. by Werner Abraham and Wim Kosmeijer, and Eric Reuland, 93–118, Mouton de Gruyter, Berlin.

Holmberg, Anders and Christer Platzack (1995) *The Role of Inflection in Scandinavian Syntax*, Oxford University Press, Oxford.

Inada Toshiaki (1997) "Interrogative Inversion in Embedded Clauses and Varieties of English," paper presented at the Fukuoka Linguistic Circles.

Inada, Toshiaki and Noriko Terazu Imanishi (1997) "Complement Selection and Inversion in Embedded Clauses," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, ed. by Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shinji Chiba, 345–377, The Taishukan Publishing Company, Tokyo.

Jonas, Dianne (2002) "Residual V-to-I," *Syntactic Effects of Morphological Change*, ed. by David W. Lightfoot, 251–270, Oxford University Press, Oxford.

Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.

Kemenade, Ans van (1997) "V2 and Embedded Topicalization in Old and Middle English," *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemmenade and Nigel Vincent, 326–352, Cambridge University Press, Cambridge.

Kemenade, Ans van (1999) "Sentential Negation and Clause Structure in Old English," *Negation in the History of English*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade, Gunnel Tottie and Wim van der Wurff, 147–165, Mouton de Gruyter, Berlin.

Kitahara, Hisatsugu (1997) *Elementary Operations and Optimal Derivations*, MIT Press, Cambridge, MA.

Kosmeijer, Wim (1986) "The Status of the Finite Inflection in Icelandic and Swedish," *Working Papers in Scandinavian Syntax* 26, Linguistics Department, University of Trondheim, Trondheim.

Kroch, Anthony and Ann Taylor (1997) "Verb Movement in Old and Middle English: Dialect Variation and Language Contact," *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemmenade and Nigel Vincent, 297–325, Cambridge University Press, Cambridge.

桒原和生（2010)「日本語疑問文における補文標識の選択とCP 領域の構造」『統語論の新展開と日本語研究』，長谷川信子（編），95–127，開拓社，東京.

Landau, Idan (2007) "EPP Extensions," *Linguistic Inquiry* 38, 485–523.

Lightfoot, David (1989) "The Child's Trigger Experience: Degree-0 Learnability," *Behavioral and Brain Sciences* 12, 321–334.

Lightfoot, David (1991) *How to Set Parameters*, MIT Press, Cambridge, MA.

McCloskey, James (1992) "Adjunction, Selection and Embedded Verb Second," Linguistic Research Report LRC-92-07, University of California, Santa Cruz.

McCloskey, James (1996) "On the Scope of Verb-Movement in Irish," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 47–104.

Munemasa, Yoshihiro (2003) *An Optimality Theoretic Approach to the C-system and its Cross-linguistic Variation*, Kyushu University Press, Fukuoka.

Müller, Gereon (1995) *A-bar Syntax*, Gruyter, Berlin.

Paoli, Sandra (2007) "The Structure of the Left Periphery: COMPs and Subjects Evidence from Romance," *Lingua* 117, 1057–1079.

Pesetsky, David (2000) *Phrasal Movement and its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.

Pierce, Amy (1989) *On the Emergence of Syntax: A Crosslinguistic Study*, Doctoral dissertation, MIT.

Pierce, Amy (1992) *Language Acquisition and Syntactic Theory: A Comparative Analysis of French and English Child Grammars*, Kluwer, Dordrecht.

Pintzuk, Susan (1999) *Phrase Structures in Competition*, Garland, New York.

Platzack, Christer (1988) "The Emergence of a Word Order Difference in Scandinavian Subordinate Clauses," *McGill Working Papers in Linguistics: Special Issue on Comparative Germanic Syntax*, 215–238.

Platzack, Christer and Anders Holmberg (1989) "The Role of AGR and Finiteness," *Working Papers in Scandinavian Syntax* 43, 51–76.

Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365–424

Radford, Andrew (1990) *Syntactic Theory and the Acqui-*

sition of English Syntax: the Early Nature of Early Child Grammars of English, Blackwell Publishers, Oxford.

Radford, Andrew (1995) "Phrase Structure and Functional Categories," *The Handbook of Child Language*, ed. by Paul Fletcher and Brian MacWhinney, 483–507, Blackwell Publishers, Oxford.

Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax*, Cambridge University Press.

Reintges, Chris H., Philip LeSourd, and Sandra Chung (2006) "Movement, *Wh*-agreement, and Apparent *Wh*-in-situ," *WH-movement: Moving On*, ed.by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 165–194, MIT Press, Cambridge, MA.

Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.

Riemsdijk, Henk van (1982) "Correspondence Effects and the Empty Category Principle," *Tilburg Papers in Language and Literature* 12, University of Tilburg, Tilburg.

Rivero, Maria-Luisa (1994) "On the Indirect Questions, Commands, and Spanish Quotative *Que*," *Linguistic Inquiry* 25, 547–554.

Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.

Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.

Rizzi, Luigi (2004) "Locality and left periphery," Structures and beyond: The Cartography of Syntactic Structures, ed. by Adriana Belletti, 223–252, Oxford University Press, Oxford.

Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.

Roberts, Ian (2005) *Principles and Parameters in a VSO Language*, Oxford University Press, Oxford.

Roberts, Ian and Anna Roussou (2002) "The Extended Projection Principle as a Condition on the Tense Dependency," *Subjects, Expletives, and the EPP*, ed. by Peter Svenonius, 125–155, Oxford University Press, Oxford.

Roeper, Thomas (1990) "How a Marked Parameter is Chosen: Adverbs and *Do*-insertion in the IP of Child Grammar," *Papers in the Acquisition of WH*, University of Massachusetts Occasional Papers Special Edition, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 175–202.

Samuels, Michael L. (1972) *Linguistic Evolution with Special Reference to English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Santorini, Beatrice (1989) *The Generalization of the Verb-Second Constraint in the History of Yiddish*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.

Sigurðsson, Halldór Ármann (1990) "V1 Declaratives and Verb Raising in Icelandic," *Modern Icelandic Syntax*, ed. by Joan Maling and Annie Zaenen, 41–69, Academic Press, San Diego.

Thráinsson, Höskuldur (2003) "Syntactic Variation, Historical Development, and Minimalism," *Minimalist Syntax*, ed. by Hendrick Randall, 152–191, Blackwell, Oxford.

Vikner, Sten (1994) "Finite Verb Movement in Scandinavian Embedded Clauses," *Verb Movement*, ed. by David Lightfoot and Norbert Hornstein, 17–147, Cambridge University Press, Cambridge.

Vikner, Sten (1995) *Verb movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford University Press, Oxford.

Vikner, Sten (1997) "V^0–to-I^0 movement and for person in all tenses," *The New Comparative Syntax*, ed. by Lilian Haegeman, 189–213, Longman, London.

Warner, Anthony (1997) "The Structure of Parametric Change, and V-movement in the History of English, *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemmenade and Nigel Vincent, 380–393, Cambridge University Press, Cambridge.

Weerman, Fred (1988) *The V2 Conspiracy: A Synchronic and a Diachlonic analysis of verbal positions in Germanic Languages*, Foris, Dordrecht.

Weinberg, Amy (1990) "Markedness Versus Maturation: The Case of Subject-Auxiliary Inversion," *Language Acquisition* 1, 165–194.

Weissenborn, J (1988) "The Acquisition of Clitic Object Pronouns and Word Order in French: Syntax orMorphology," ms., Max-Planck-Institute, Nijmegen, The Netherlands.

Weverink, Meike (1991) "Inversion in the Embedded Clause," *Papers in the Acquisition of WH*, University of Massachusetts Occasional Papers, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 19–42.

Wexler, Ken (1994) "Finiteness and Head Movement in Early Child Grammars," *Verb Movement*, ed. by David Lightfoot and Norbert Hornstein, 305–350, Cambridge University Press, Cambridge.

Zwart, C.Jan-Wouter (1997) *Morphosyntax of Verb Movement: A Minimalist Approach to the Syntax of Dutch*, Kluwer, Dordrecht.